

学習内容と到達目標

👉 将来の夢や希望について、子供の頃の夢や希望と比較しながら話すことができるようになる。

指導のポイント

1. INTRODUCTION

第7課の復習。ステップ1での学習内容が定着しているか十分に確認した上で先に進む。①で4人の人柄について話す時、「～くて、～」や「～で、～」などの形容詞の接続ができていなかったり、趣味や特技について話す時、「～は～が+形容詞」の文型が使えていなかった時は要注意。②のリスニングも同様。

2. SPEAKING

絵を見ながら、山川さんたち4人の子供の頃の夢と今の夢を説明させる練習。予習をしていなければ、「山川さんの夢はデザイナーです。理由は絵が好きです」のように話すことが予想されるが、この段階ではその程度の説明で構わない。ただし、文末を過去時制に変えることも忘れていたら、注意を促す。

3. LISTENING

子供の時の夢、現在の夢ともに理由が2つずつ述べられていて、しかもそれが1文にまとめられているため、正確に聞き取るのはかなり困難。また、動詞もこれまでのような「ます形」ではなく、辞書形が使われているので、知っている動詞でも形が変わっていることで理解できない可能性が高い。ゆえに、①では大まかに間違いを見つけられればOK(例えば、山川さんは「本を読むのが好き」と話しているが、「本が好き」と答えられれば十分と見なす)。細かな部分の聞き取りは②で行い、「ヨム」が「読みます」の辞書形であることを文脈から(ここでは目的語の「本」から)類推させる。もちろん学習者が予習をしていれば(あるいは予習を義務づけていれば)、これほど慎重に扱う必要はなくなる。

4. FOCUS

学習者の中には初級後半や中級になっても(以前学習したことを忘れたのか)五段動詞と一段動詞の見分け方を知らない人がいるので、④では、最初に一段動詞と五段動詞の見分け方を学習させ、その後に辞書形の作り方を考えさせるという手順を踏んでいる。「この程度の内容なら教師が明示的に教えた方が効率的」とも思われるが、学習者に自分で気づかせることの意義を考え、このような形式にした(この練習については国際交流基金の日本語教授法シリーズの第4巻『文法を教える』(ひつじ書房)でも取り上げられている)。また、⑨と⑩では「コト」は客観的、「ノ」は主観的とし、文末に「楽しい」や「好き」などの形容詞が来る文では「ノ」を使うと説明することにした。

注、「日本語を教えることは難しい」と言うより「日本語を教えるのは難しい」と言った方が実感がこもっている。(Makino & Tsuitsui 『A Dictionary of Japanese Basic Grammar』(The Japan Times)を参照)

6. PAIR WORK

「子供の時、スーさんはモデルになりたかったです」のように、情報交換するだけで終わらせるのではなく、なぜモデルになりたかったのか、スーさんの気持ちになって理由も言わせると、「～し、(～し)」を使う練習もできる。

活動例

☞ [6. PAIR WORK] ②と [7. WRITING] がこの課の主要な活動なので、この2つの活動にじっくりと時間をかければ十分。九大の国際コースの学生のように、日本人学生と接触する機会が多ければ、4課でしたようなインタビュープロジェクトをするのもおもしろい。